

2007年10月18日（木）、EBSの公開セミナーが開かれました。

安富信哉先生（大谷大学教授・EBS事務局長）に、鈴木大拙師英訳『教行信証』（*The KYŌGYŌSHINSHŌ: The Collection of Passages Expounding the True Teaching, Living, Faith, and Realizing of the Pure Land*）のセミナーをご依頼したところ、当初の予想を上回る参加者が受講されました。奇しくも、開催日の10月18日は、鈴木師の誕生日でした。

以下、第1回セミナーの概要をお伝えします。

### 鈴木大拙（1870-1966）との出遇い

今、大拙先生の英訳『教行信証』は絶版になっています。それが2011年に親鸞聖人の750回忌を機に、近く再版されるようです。その作業が（2007年10月現在）どの程度進んでいるかは分かりませんが、再出版されたらまた英語で大拙訳『教行信証』が読めるわけです。しかし、そういう英語の文章を、本が出たから読んでいくといっても、いきなりにはなかなか読めないと思います。こういう機会に少し経験のあるものが、誘い水的なことをやっておいた方が良さだろうな、と思います。私も去年から、今まで以上に深くEBSに関わってくるようになりました。こういう機会に少しでも皆さんがたのお役に立てればと思って、こういうセミナーを開かせてもらったことです。

それで、今日は最初ということでもございますので、私自身と大拙先生との関わりについて、少しばかりお話しをしたいと思います。

今皆さんがいらっしゃるこのEBSは、大谷大学内にもともと戦前からあったものです。鈴木先生は、1921（大正10）年3月、51歳の時に、佐々木月樵<sup>げっしょう</sup><sup>1</sup>（1875-1926）先生、西田幾多郎<sup>2</sup>（1870-1945）先生の勧めで、真宗大谷大学教授になりました。その時に、ビアトリス（Beatrice Lane Suzuki, 1877-1939）夫人も予科教授嘱託になって、そして5月に学習院教授を辞められました。それで東方仏教徒協会（The Eastern Buddhist Society）を設立して、『*The Eastern Buddhist*』（以下EB誌）という英文雑誌を創刊して、ビアトリス夫人とともに編集者となっております。

この（EB誌第1巻1号）巻頭言によりますと、

The Society has for its objects the study of Buddhism, the publication of the results of such study, and the propagation of the true spirit of Buddhism.

Persons interested in the objects of this Society are invited to join.

Yearly membership is ten yen.

*The Eastern Buddhist* is free to members of the Society.

All correspondence should be addressed to

the Secretary,

Daisetz Teitaro Suzuki,  
572 Zoshigaya, Takata,  
Tokyo.<sup>3</sup>

とあります。つまり、EB 誌は、仏教の研究と、研究成果の出版と、仏教精神の普及が目的だということになって始まっております。

こうして大拙先生がEBSを始められたのですが、1939（昭和14）年、ビアトリス夫人がお亡くなりになりました。それでEB誌は休刊になっていましたね。それで1949（昭和24）年に再刊になって、編集者が鈴木大拙先生（79歳）、それから杉平顛智先生しずとしですね。そしてまた1958（昭和33）年にEB誌が休刊になって、そして1965（昭和40）年にEB誌がNew Seriesとなって刊行されて、そこで大拙先生が95歳で編集長になって、編集者が西谷啓治<sup>4</sup>先生と坂本弘先生が中心となって再刊されたわけです。そして1966（昭和41）年に大拙先生が96歳で亡くなっておられます。

私は大拙先生と全く面識はございません。ただ一度だけ、お姿を拝見したことがあります。これは1964（昭和39）年5月31日に、東京有楽町の読売ホールで開かれた「親鸞聖人讃仰同朋大会」のときで、当日の主賓であった大拙先生は94歳でした。小柄な容姿で、セルロイドのつばがついた帽子をかぶっておられました。大拙先生は色々な帽子をかぶるんですね。帽子がトレードマークみたいところがあって、色々な帽子を集めておられます。もう亡くなりましたが、吉岡奎先生は、あの時ステージの中央まで大拙先生をお連れしたのは自分だとおっしゃっておられました。大拙先生はステージが明るすぎるので、手をかざして「まぶしい」といわれました。そこで照明の光線が落とされて、そうして講演が始まりました。お話しの内容は覚えておりませんが、記録から「念仏の本義」という講演であったことが分かります。

その時が、私が大拙先生のお姿を見た最初で最後です。ちょうど大学2年生の時でした。その時は早稲田大学にいたのです。その後、大谷大学大学院に入り、真宗学を専攻するようになりました。それでEBSのオフィスに出入りしたわけです。その時にはEBSは今の大学1号館の東側の所で、1階が食堂になっておりました。2階がEBSのオフィスだったんですね。あれは結構良い建物だったのですが、それが今、キャンパス整備で壊され、その面影もありません。そこで当時EBSの事務局長が伊東慧明先生いとうで、坂本弘先生などと英訳『教行信証』の研究회가、出版後のチェックも必要だということで開かれていました。そこに坂東性純先生しやうじゅん<sup>5</sup>・佐藤平先生さいとう<sup>6</sup>もおられて、現在EB誌の編集スタッフであるWayne Yokoyamaさんや私なんかそこに出入りしておりました。それで、EBSで大拙先生の身近に生活しておられた方々からお話しをお伺いする機会がありました。そして1973（昭和48）年に英訳『教行信証』が出版され、その時から英訳『教行信証』を定期的に、スタッフの先生方と集まって読んでおりました。

それで、1997（平成9）年に鈴木先生の没後30周年記念の特別展が4月から5月にかけて、

百万遍しひんかくの思文閣美術館で行われました。その時には上田閑照しずてる先生などがお話しされました。そこで展観しんかんがいくつかありました。それから10年後の去年（2006年）、大拙先生の没後40周年ということで、大谷大学、鎌倉の松ヶ岡文庫、そして金沢で催し物が開かれました。大谷大学の博物館でも特別の展観しんかんがありました。皆さんもあるいはご覧になられたかもしれません。

### 「かけ橋」としての鈴木大拙

そういうことで、私は英訳『教行信証』とか、他の真宗関係の大拙先生の書物を読んだのです。大拙先生はどういう方であるか。一つはやはり「かけ橋」という意味があるのだろうと思います。仏教はインド・中国・日本というように、東へ東へと伝わってきたということがあります。これを「仏教東漸とうぜん」といいます。ところが仏教東漸とはいつても、太平洋に阻まれて、日本でストップしてしまったわけですね。仏教東漸がストップしたこの状況を、ある面で打ち破ったのは、1893（明治26）年にアメリカのシカゴで開催された世界宗教会議9（the World Parliament of Religions）ですね。あの時に逆にスリランカとかインドとかからヨーロッパの方に仏教が入ったんです。いわば「仏教西漸」です。そういうことがあって、インドからイギリス、更に大西洋を渡って仏教がアメリカに伝わっていく、そういうルートもありました。日本からは積宗演そうえん（1859-1919）が参加し、大拙先生が通訳として同行されました。またご存知のように、このとき清沢満之まんし<sup>10</sup>（1863-1903）先生の『宗教哲学骸骨<sup>11</sup>』が英訳されて紹介されたということもありました。

とにかく、近代に仏教が伝わっていった。それも主に禅が伝わっていったわけです。『仏教東漸—太平洋を渡った仏教—<sup>12</sup>』という多田稔みのる（現帯広大谷短期大学長）先生のご著書があります。これを読みますと、禅が中心です。大拙先生はそういう意味では仏教を、特に禅を西洋世界に伝えたという大きな功績があります。大拙先生は、よく「現代の三蔵法師」と呼ばれています。ご承知のように三蔵法師は玄奘三蔵げんじょう（602-664）が有名ですけれども、インドから中国に仏教を運んで来るについて、大変な御苦労をされました。大拙先生はそのような大きな仕事を現代において行なった。ある意味で「現代の三蔵法師」ということができます。

では、鈴木先生は一体何のかけ橋になったんだろうか、そう思うとき、一つは「東洋と西洋のかけ橋」になったといっても良いかと思います。「禅と現代のかけ橋」となったということもあろうかと思います。それともう一つは、あまり知られていないけれども、「浄土真宗と禅のかけ橋」となった。こういうように3つのかけ橋となられたと見ることもできます。

このうち「念仏と禅」は、ある意味では、近いともいえるし、別の意味においては、遠いわけです。近代になってから「真宗」と「禅宗」を近づける努力は行われてきました。例えば大内青巒せいらん（1845-1918）という人がいます。この方は「禅浄一致」ということをおっしゃっています。青巒師は曹洞宗の方で、やがて還俗して、「念仏」と「禅」ということで、ひとつのかけ橋になりました。しかし大拙先生の場合は、浄土教の念仏にとどまらず、「真宗」と「禅」

の「かけ橋」になったといえるかと思えます。

大拙先生が特に「真宗」に対して非常に関心を持つようになってきたというのは、先程も申したように、佐々木月樵先生に招かれて、大谷大学に来られたということが大きいわけです。これについては、皆さんにもお配りした資料（安富「鈴木大拙と教行信証<sup>13</sup>」）の中に、ちょっと触れたところでもありますけれども、大拙先生は初めは真宗の教学がお好きでなかったとか、『教行信証』になじめなかったところもあったようですね。これについて私は、例えば「二 理解への通路」という節の中で、

大拙がいつ頃から『教行信証』に親しむようになったかは確かではない。ただ注意されるのは、師がこのような高い評価を本書に対して早い時期から下していたわけではないということである。大拙は、大正十年（1921）春に、佐々木月樵学長の懇請によって大谷大学に赴任した。佐々木は、高い建学の抱負と理想から、大拙を招聘したのである。このときから大拙は、真宗の宗学者たちと身近に接するようになる。しかしそこに眼にしたものは、『教行信証』に縛られ、その字句の詮索に明け暮れる宗乗学者たちの姿であった。参禅の体験によって、宗教の直接的経験の大切さを覚り、欧米の実証的精神を身につけた大拙にとって、宗学者たちの姿は甚だ非宗教的なものと映ったであろう。そこで、親鸞に『教行信証』がなかったらよいのに、としばしばこぼすことになる。

講釈に囚はれ、『教行信証』に縛られて、自釈の文字のみを詮議するものを賢者と云ふ、又博士たちと云ふ。そんな人には宗教の「妙趣」がわかる理窟がない。『歎異抄』の云ふ通りである。それでわしは親鸞聖人に『教行信証』がなかったらよいと云ふのだ。

と述べました。大拙先生は『歎異抄』には早いときから惹かれておりますけれども、なかなか『教行信証』には近づけなかったようです。

ご承知のように、大拙先生は北陸の金沢の方のご出身です。だから真宗の盛んなところに生まれたということもあって、「真宗の風土」の中で、真宗的宗教性を自然と身につけていたから、真宗に対する親近感を早くから持つておられたのでしょう。そういうことで、佐々木月樵先生に招かれて大谷大学に来たとき以来、原典を翻訳などしたり、書物や論文を著したり、色々としておられます。1910（明治43）年、41歳の時には“*Principal Teachings of the True Sect of the Pure Land*”（『真宗要義』）を佐々木月樵先生と共著されています。

それから1911（明治44）年、42歳の時には“*The Life of the Shonin Shinran*”、これは覚如上人の『御伝抄』を翻訳したものです。これは“*Collected Writings on Shin Buddhism*<sup>14</sup>”の中に収録されています。

また1921（大正10）年、52歳の時には大谷大学教授に就任して、EB誌を創刊しておられます。

1928（昭和3）年、59歳の時には『歎異抄』の翻訳“*The Tannisho*”を著しております。これも今立吐醉いまだてとすい氏の依頼によって、“*Collected Writings on Shin Buddhism*”の中に入って

ります。

それから 1937 (昭和 12) 年、68 歳の時には “*From Shin Sect*” (これは粗末なものですが) が出ております。

1949 (昭和 24) 年、戦後になって、80 歳になってから、“*A Miscellany on the Shin Teaching of Buddhism*” を著されました。これは真宗の様々な文章を集めた論文集です (“*Collected Writings on Shin Buddhism*” に収録)。

そして 1973 (昭和 48) 年に、逝去されて 7 年後ですが、『教行信証』の翻訳 (“*The Kyōgyōshinshō: The Collection of Passages Expounding the True Teaching, Living, Faith and Realizing of the Pure Land*”) が、真宗大谷派から出版されています。

そういうことで、禅の方でありながら、真宗関係の著述がいくつかあります。もちろんこの他にも「念仏と禅」とか、“*Tariki Mystic*”とか、浅原才市 (1850–1937、<sup>さいち</sup>妙好人) さんを紹介したものとか、色々あります。大拙先生といえば専ら禅の人だと思っていたのに、実は浄土教とか、真宗・念仏に意外と近い人だなあと、あるいは思われるかもしれません。

そういう背景の中で、大拙先生は『教行信証』を英訳されるわけです。これは晩年の畢生のお仕事だと思います。そういうことで、大拙先生が亡くなられてもう 40 年が経ちますけれども、英訳『教行信証』の再版本も近々出版されるということです。この際、また読めるのは有難いことです。

それで、このセミナーで第一回目から大拙訳『教行信証』の本文を読んでいこうとも思ったんですけども、どうも最初からというのも、もう一つ気が乗らないといえますか… 本学では欧文真宗仏典という、今、井上尚実 (<sup>たかみ</sup>大谷大学専任講師) 先生がやっておられるクラスを、以前に私も担当していたこともあったわけです。そこでは大拙訳『教行信証』を使ったことはなかったのですが、自分たちで、何人かの方々と英訳教行信証研究会という勉強会を開いて読んだりもしていたのです。しかし、大体、総序から輪読が始まると、<sup>きょうのまき</sup>教巻くらいで終わっちゃうんですね (笑)。だから今回は<sup>しんのまき</sup>信巻くらいから (笑) ということで始めようと思しました。何よりも、実際に読んでいくということを通して勉強していければ、と思います。

### 『教行信証』英訳の歴史

お配りした資料の中に、私が以前書いた「英訳『教行信証』の諸問題<sup>15</sup>」があるのでご覧下さい。信巻に入る前に、『教行信証』というテキストが、どのようにして翻訳されてきたのかを、少しおさらいしておきたいと思います。私も久しぶりに大拙訳『教行信証』を読むため、思い違いがあるかもしれませんが、この論文の「はじめに」の所を読んでみたいと思います。

『教行信証』の翻訳は、容易ならざる事業である。そのため翻訳が着手されたのは戦後になってからである。『歎異抄』の (ママ) 部分訳がすでに明治 44 年 (華園兼定訳『精神界』11-7) に現れていることを想えば随分遅れている。いかに『教行信証』の翻訳

が困難であるか領解されるであろう。

その困難の理由としては、「言葉の難解さ、分量の大きさ、加えて〔刊本の〕多くの小さな誤写と不完全さ」（山本晃紹<sup>15</sup> “The KYOGYOSHINSHO” 序言）が挙げられる。少し考えただけでも、東洋の思想を西洋思想の文脈に置き換えることの困難、表意文字である漢字を表音文字である英語に移すことの困難、何よりも翻訳に先立って本書の原意をどう解釈するということの困難が想像される。『教行信証』は小説ではない。この本はよく咀嚼しない限り、まったく消化することができない。

それは、かつて仏典が漢訳されたときに直面した困難に似ているように思われる。晋の道安は、「五失三不易<sup>16</sup>」を挙げてその困難を説明したが、『教行信証』の英訳にもそこに挙げられたような困難がつかまとう。

「五失三不易」というのは、翻訳することによって失うものを、こういうわけです。例えば色々と梵語が漢語にならないとかいうことがあります。詳しくは仏教辞書をご参照下さい。

しかし行手を阻む幾多の困難があるにもかかわらず、『教行信証』は翻訳が試みられ、（1986年）現在までに全訳・部分訳をあわせれば七種の訳が出ている。古来「翻訳者ハ反逆者ナリ」（A translator is a traitor）の烙印が押されてきたが、それで翻訳者の意気が沮喪したことはなかった。『教行信証』の翻訳を最も早く手がけた稲垣最三氏（稲垣久雄先生のお父さんですね）は、「あふれ出る私の喜びと三宝への謝念を抑えることができず、将来への叩き台となることを望み、あえてこの困難な仕事に取りかかった」（“Kyo-Gyo-Shin-Sho” 序）と述べている。

これから『教行信証』の標準訳があらわれるまでは、まだ幾星霜を要するであろう。聖書を例に取れば、J. ウィクリフによるラテン語からの英訳聖書が完成してから、ジェームズ一世のもとで47名の学者・聖職者の手によって欽定訳聖書（AV<sup>17</sup>）が刊行されるまで、二世紀余の歳月がかかっている。

英訳『教行信証』が英語『教行信証』になるまでにもまだしばらく時間が必要であろう。おそらくこれから外国でも様々な翻訳を比較・対照しつつ、『教行信証』の思想に眼を開く多くの人々があらわれるであろうが、私たち日本人は、それらの欧米人を通して逆に『教行信証』の思想的意義について新しい角度から教えられることも多々あることと思われる。

筆者自身は、これまで『教行信証』の英訳事業に取り組んだ経験がなく、その困難の度合も観念的にしか知らないが、小稿では、これまでの労作を概観するとともに、その問題状況の一端に触れてみたい。

ということで、部分訳が1954（昭和29）年から出ておりますね。これを表（表I）にしております。

私がこの論文を発表したのが1986（昭和61）年ですから、その後、例のDennis Hirota<sup>18</sup>先生の“*Collected Works of Shinran*<sup>19</sup>”が出ています。だからこの表は、もはや年表的に古くて使えませんが、一応振り返ってテキストを概観しますと、1954（昭和29）年に本派本願寺

（西本願寺）から、稲垣<sup>さいざう</sup>最三先生のもものが発行されています。これは行<sup>ぎょうのまき</sup>巻の途中までの逐語訳になっています。

それから“*The Kyogyoshinsho*”が、1955（昭和30）年に Honpa Hongwanji Mission of Hawaii<sup>20</sup>から出た英語の“*The Shinshu Seiten*”に収録されていますが、これは現在入手できないと思います（EBSには蔵書としてあり）。

それから1957（昭和32）年と58年（昭和33）に“*Kyōgyōshinshō Monru*”となって、これは杉原<sup>しずとし</sup>顥智先生がEB誌（Vol. VIII-3, VIII-4）の中で部分的に翻訳されています。

それから1958（昭和33）年、山本晃紹先生の“*The KYOGYOSHINSHO*”。これはEBSのオフィスにも置かれていますので参照して下さい。これは全訳です。英語のネイティブスピーカーから見たら、ちょっと英語が変なところがあるかもしれませんが、化身土巻<sup>けしんどのまき</sup>までちゃんと翻訳され、非常に便利です。大拙先生のは真仏土巻<sup>しんぶつどのまき</sup>と化身土巻がないですから、その点で役に立ちます。

それから1966（昭和41）年、Ryukoku Translation Series の部分訳“*THE KYŌ GYŌ SHIN SHŌ*”があります。これもEBSのオフィスに置かれています。これも便利なんです。日本語と英語を対照していますから。これは部分訳ですけれども、日本語の読み方がローマ字で表記されています。これは正確ですか？（アメリカ人参加者：読みにくいです（笑）。）読みにくいですが、僕が学生の頃、西洋の方が日本に来られて『教行信証』を読むときは、大抵これを使ったんです。漢文の読み下しがあつて、英訳も同じページに書かれていて便利ですから。ただ、翻訳は御自釈の一部分だけです。こういう実験的なことは、西本願寺ではすごくいっぱいやっているんです。

そういう中で大拙先生の“*The Kyōgyōshinshō*”が出てきたわけなんですね。これが、私たちがこれから勉強していこうとしている翻訳です。

その後、1978（昭和53）年に Buddhist Churches of America<sup>21</sup>（BCA）から出た“*Shinshu Seiten*”に“*The Teaching, Practice, Faith, and Enlightenment—Kyō-Gyō-Shin-Shō—*”が載っています。これも部分訳の小さいものです。英語の“*Shinshu Seiten*”は2つ出ています（両方ともEBS蔵書としてあり）。

そして上田義文先生監修、Dennis Hirota 氏訳の“*The True Teaching, Practice, and Realization of the Pure Land Way*”という『浄土文類聚鈔』<sup>じょうどもんるいじゅしやう</sup>（『教行信証』の略文類）の翻訳が、1983（昭和58）年に出ています。これは“*Collected Works of Shinran*”に収録されています。ご関心があればご覧下さい。

## 大拙訳の特徴

大拙先生の訳は、画期的な訳です。どうしてかという、今まで浄土教は、西洋世界でほとんど正式には知られていなかった、つまり日本人の開教使の方々が伝えていって知られている

という程度でした。そういう中で、大拙先生が訳したということが大きかったわけです。大拙先生は、特に西洋社会でネーム・バリューが高いですから。「あの鈴木大拙が『教行信証』を訳したのか」となる。そうすると、親鸞聖人の名前も高くなるわけです。それと大拙先生の訳であれば、やっぱり外国の図書館も入れてくれるわけです。日本人のネームの知られていない人が訳しても、「うちの図書館に入れましょう」ということにはなかなかならないと思うんですね。そういう点では、大拙先生のネーム・バリューで図書館にかなり入ることができたということは、やっぱり大きかったらうと思います。とはいっても、そんなに部数が出たとも思われませんか、広がったとは考えられません。しかしある程度、大拙先生の名前で『教行信証』が世界に知られると同時に、親鸞聖人の名前も知られるようになったということはあろうと思います。

それで大拙先生の場合、『教行信証』の題号を訳すとき“*The Collection of Passages Expounding the True Teaching, Living, Faith, and Realizing of the Pure Land*”となっていて、「行」を“Living”、「信」を“Faith”と訳しておられるわけです。これが大拙訳の一つの特徴です。これらの訳語について、色々な議論があったわけです。若干色々な訳語を表（表II）にしてみました（「英訳『教行信証』の諸問題」のII-A参照）。

例えば「往生」の訳語について、これを「本願寺訳」「龍谷訳」「山本訳」では皆「birth」としているけど、鈴木先生は「birth」も用いますけど、「rebirth」としているところもあるわけです。そうすると「rebirth」で良いのか、という問題が出てきます。「もう一度生まれる」「再生する」ということでしょ？ だから大拙訳『教行信証』が出たとき、素晴らしいといった東京大学の早島鏡正先生が、<sup>きやうしやう</sup>「ただ「rebirth」というのはいかがなものか」といわれたのを思い出します。「rebirth」といったら、また次の所に生まれていくということだろうけど、浄土に生まれるとはそういうことではないはずだ。迷いの生をもう一度繰り返すということになれば、ちょっと変ではないですか」といういい方をされていました。どうでしょうかね。「Twice born<sup>22</sup>」ということになれば良いんですか（笑）？

だから「往生する」を他の訳では「attain birth」とか「gain birth」と訳されているのですが、大拙訳では「attain rebirth」という語も採用しています。

「浄土」を大拙先生は「Pure Land」、本願寺訳では「Buddha Land」としていますね。

ちなみに大拙訳に<sup>なんし</sup>「難思往生」とか<sup>そうじゆりんげ</sup>「双樹林下往生」がない。大拙先生が化身土巻を訳されてないから、ここにはないわけです。

それから<sup>しやうじやうじゆ</sup>「正定聚」は、これも少し分かりにくいかもしれませんね。「company of the right definite assurance」。

それで「証」は「realizing」と訳されております。これは大拙訳の一つの特徴ですね。つまり「証<sup>さつ</sup>る」ということは、どこまでも「realizing」と進行形にすることによって、ダイナミックな動きを出すために「-ing」になっているんですね。「Enlightenment」という言葉になると、キリスト教的な啓蒙的なものになるということで、大拙先生は使っておりません。

それから「本願」を他訳では普通「Primal Vow」とか「Original Vow」となるのですが、大拙訳では「Original Prayer」と訳しています。

それから「回向」も重要ですね。「ekō」または「merit-turning-over」とされています。「往相回向」は「the outgoing ekō」と、「還相回向」は「the returning ekō」と、翻訳せずにローマナイズして使っています。これは非常に重要だと思うんです。というのも、本派の翻訳だと「the aspect for our going forth to the Pure Land」「the aspect for our return to this world」となって、「我」が往って「我」が還って来るということになってきます。「our」が入ると、人間が往って、また還って来るという、Uターンのものになって、親鸞聖人の「回向」理解としてはどうか、とも思われます。もっとも、本派の方々にはそういう回向観があるのだろうとも思います。

あとは「大行」が「Great Living」。これは独特な使い方です。一般には「Great Practice」とするのですが、大拙先生は「Great Living」と訳した。これについても、また今後、確かめる時があっても良いと思います。

「信心」が一つの問題なんですよ。これが大拙訳では「faith」と「believing mind」という言葉を使っているんですね。これを本派の方は「shinjin」といつて翻訳しないんですね。やっぱり「faith」になるとキリスト教的な臭いがついてくるから、そのまま「shinjin」と訳すわけです。

これはサンスクリットから漢語に翻訳した際、仏教でもそういう言葉はいくつかありまして、「般若」(prajñā)とか、仏陀(buddha)でもそうですよね。これは翻訳できないから、そのまま使うわけです。これは「五種不翻の義」(下記参照)の中に入ってくるわけです。

そんなことで、表にしてみますと、大拙先生の訳の特徴が見えてきます。これから読んでいく上で、他の訳と比べる中で、大拙訳の独自性と問題点も見えてくるかと思えます。

### 「信心」と「faith」

それで、「英訳『教行信証』の諸問題」のII-B. 解釈の葛藤というところで、「信心」の訳語について触れています。これも大拙訳の信巻を読んでいく上で知っていた方が良く思うので、読んでまいります。

言語は、それ自体が文化的・歴史的背景をもっている。そのためある言語を別な言語体系に置きかえるときには、原意の喪失あるいは変型という大きな危険を覚悟しなければならない。とくに『教行信証』のような思想書を外国に伝えようとする場合、その概念を翻訳することには非常に困難な問題がつきまとう。仏教語全般に標準的訳語がない現在、『教行信証』の訳語の決定にも様々な紆余曲折があったことは、翻訳者や編集者のノートからも十分に窺われることである。その様々な訳語をめぐる検討は、これから国際的規模で展開されるであろうし、またその検討は親鸞の思想を見定める為にも極めて実り多いこ

とであるに違いない。本節では、これらの訳語のなかでしばしば問題になる「信心」という語をとり上げて、その問題状況の一斑をさぐってみたい。

信心は、真宗における中心概念である。真宗の信心は、独自の意味をもち、とくにキリスト教世界である欧米にその真意を伝えようとするには様々な問題を伴い、また誤解を受け易い。そのことは、開教使や外国人の研究者に常々指摘されるところである。

まず長い間シカゴを中心に開教活動を続けておられる久保瀬<sup>ぎょうめい</sup>23（1905–2000）師（Rev. Gyomay Kubose）の言葉を聞いてみよう。

「念仏の世界を次元を異にするアメリカ人に伝えるには色々の問題があるが、第一に考えられる事は言葉の問題である。英語はキリスト教文化と共に発達して来たものであるからキリスト教の二元論の概念が言葉自身に内在しておく。それだからキリスト教の言葉で仏教を訳すと多くの場合全く違った意味に了解されるのである。最も誤解され易いのは信心の信である。信を faith と訳せばそれはキリスト教的信であって人間が神を信ずる信で、人間の主観の信である。被造物である人間が造物主である神を信ずる信で二元論の上に立つ信で、真宗で云えば自力の信である。親鸞の言う信は他力の信であって『まこと』であり、個人の自力の信ではない。『信巻』の信樂の釈にある様に『信は即ち是真也、実也、誠也、満也』の信で個人の主観的に只信ずる信ではなく真実誠満、極成用重、審驗宣忠の信である。信心はまことの心である。主観的信であって客観的妥当性をもった信である。親鸞の信を belief とか faith に訳す時にそれは只単なる A が B に対する信になって親鸞の云う他力の信、廻向の信、まことと云う信にはならない。そこに根本的誤解が生ずるのである。アメリカの多くの人が真宗の翻訳書を読んで、アミダの Grace（恵み）を信じて助かる様な信仰はセントポーロの信仰で沢山だと云うのである。真宗などアメリカに必要ないと云うのである。これは信が faith と訳されて、間違って解かれておるからである。真宗の信は truth か又は花文字の大きな F を用いて Faith と書いて faith と区別す可きだと考えられる。」

（「真仏教とその問題」『親鸞教学』十三号）

久保瀬先生は<sup>あけがらすはや</sup> 暁鳥敏（1877–1954）先生のお弟子さんで、日系アメリカ人二世の方です。シカゴから、一頃、大谷大学大学院修士課程に留学されていました（昭和 43 年真宗学修士課程修了）。その頃、私も稲葉秀賢先生のゼミでご一緒し、お話しを聞く機会もありました。大谷大学とのこんなご縁で、『親鸞教学』に論文を寄せて下さったわけです。

以上のように、久保瀬師は、自からの体験を通して、真宗の「信心」が英語に相当する語がないことを指摘し、また faith と訳した場合に生じる問題性について言及されている。またアメリカの研究者の間でも、「信心」という語が faith と違った概念であることが指摘されている。カリフォルニア大学（バークレー校）博士課程のマーク・ブラム<sup>24</sup>（Mark Blum）氏は次のように述べる。

「親鸞における『信心』の信は、その教学思想の源泉として大変に根本的なものであ

り、それゆえにこれを単に“believing”とか“faith”と訳するのは彼を不当に扱うことになることは言うまでもない。宗教的文脈で用いられる限りは、いかなる意味においても、そうしたからといって、“faith”の重要な意義の品位を下げることにはならない。

「信心」と“faith”を比較することは、十分な根拠があるし、もちろんこの二つの語は意味の広い領域において重なるところがあるが、二つの概念を比較することが小論の目的ではない。しかし親鸞にとって、信とは、自らが帰依した教えの終末論的価値をただ信ずるというだけではなく、真実、リアリティそのものを示しているということが分かる。それに加えて、信とは静的な概念ではない。なぜならば、『用<sup>ゆう</sup>なり……審<sup>しん</sup>なり、驗<sup>けん</sup>なり』の語で親鸞が示したように、信ずるとは、活発に尋ね、検討し、すなわち問うことである。われわれが心にとどめておかねばならぬのは、『信心』における信あるいは信仰としての要素は、『証明に立脚しないところの信』(Stein ed. 1975:475)とか『信頼して受け入れる』という表現で示されるような、西洋における伝統的な信仰概念とは異なる何物かを示しているということである。」

(‘Shinran’s Concept of *Shinjin* in the *Kyōgyōshinshō* “Journal of Asian Culture” vol. IV Spring 1980) 原英文

ブルーム先生は、私が助手だった頃、京都大学の研究生として来日され、一緒に勉強し、今日に至っている方です。アメリカでは数少ない浄土教研究者の一人です。EBSでも大変にお世話になっている方です。現在、真宗総合研究所（真総研）の国際仏教研究班の嘱託研究員で、ニューヨーク州立大学の准教授をお勤めになっておられます。この論文は、先生がカリフォルニア大学バークレーの大学院生だった頃に書かれたものです。次に進みます。

以上のように、「信」あるいは「信心」と英語の‘faith’との間にある意味の差異性は、すでに先学に指摘されているところである。しかしこのような危惧にもかかわらず、現実にはそれに代わる適切な訳語がないこと、faithという語の持っている包容性あるいは一般性から、従来の英訳『教行信証』では、「信」「信心」に対して‘faith’の語があてられてきた。

これに対して、「信心」をあえて訳出せず *Shinjin* と日本語のまま残しておくという方法を採用したのは本願寺訳 (Shin Buddhism Translation Series) である。本シリーズ最初の“The Letters of Shinran—Mattōshō” (1978) のグロッサリーに、その理由として、

「信心は普通‘faith’と訳されてきたが、この語は、ユダヤ・キリスト教的な用語として余りにも強くまた様々に色彩られているので、この語を用いるのは信心の本来の正確な意味を損なうことになる、とわれわれは考えた」。(原英文)

と説明されている。

この“The Letters of Shinran”の出版に対して、ウィスコンシン大学(ノースランド校)教授のトマス・カスリス<sup>25</sup> (Thomas P. Kasulis)氏は書評を寄せた。そのなかで「信心」を‘*Shinjin*’と原語で残し、「浄土」を‘Buddha Land’、「義」を‘self working’&#x2013;

たことについて所見を述べたが、「信心」を‘faith’としたことについては、

「第一にいままでの真宗の翻訳に親しんできたものには、従来ほかの翻訳で‘faith’と訳されてきた『信心』が *shinjin* と日本語のままローマナイズされていることに驚くであろう。……その立場は筋が通っているし、私は、真宗教義の有神論の様相を過度に強調すべきではないということには同意する。もし‘faith’という語を避けることが、この点で役に立つのであれば、私はこの変更にも同意しよう。」

（“Philosophy East and West” vol. 31, No. 2, April 1981）原英文<sup>26</sup>と一応その立場を支持している。しかしカスリス氏は同時に、「信心」も「信」もともに区別なく *shinjin* と訳されていること、「信ずる人」の訳に“people who believe”と belief の動詞である believe が用いられたことに疑問を投げかけ、また *shinjin* をそのまま「まことのこころ」と置きかえているのは拡大解釈ではないかと指摘している。

カスリス先生も、真総研で何度か講演されて、私たちに親しい先生です。大学院特別セミナーで、客員教授もお勤めになられました。去年は、先生に EB 誌の編集顧問をお願いしました。先に進みます。

このカスリス氏の批評をふまえて、本願寺真宗翻訳シリーズ委員会は、この語を訳出せずに *shinjin* と原音をローマナイズしたまま残した理由について、「『信心』と“Faith”」と題して再度説明した。

「信心と faith の根本的な違いは faith の概念は神（創造主）と人間（被造物）という二元論に立脚するが、一方、信心は、仏と人間が一体となることであり、人間が仏となってゆくことである」

（“Notes on the Inscriptions on Sacred Scrolls—Songō Shinzō Meimon” 1982 巻末）原英文

この相違点をふまえて、「信心」を訳出せずにローマナイズしたのであるが、それは、先入観念より自由になるという点において好ましいと言われるのである。

ある特別な語の原意を保持するために、翻訳するべきか否か。ある思想を異文化世界に伝達しようとするために、翻訳者はしばしばそのような岐路に立たされることがある。そのことは、梵語仏典の漢訳に際してもしばしば生じた問題であった。訳経史の上で最大の仕事を遺した玄奘は、梵文を漢訳する場合に、ただその音のみを写して語義を訳さないものに五種の類例があるという。

- (1) だらに 陀羅尼のように秘密のもの
- (2) ぼかぼん 婆伽梵のように多くの意味を含むもの
- (3) えんぶじゅ 閻浮樹のように中国には存在しないもの
- (4) あのかたらさんみやくさんぼだい 阿耨多羅三藐三菩提のように以前の訳者が音写して一般に意味が知られているもの
- (5) はんにか 般若のように智慧と訳すれば軽薄になるから尊重して訳さぬ者

以上の五種の梵語は原語のまま音写して訳さないとされる。この玄奘の「五種不翻の義」に倣って、いま「信心」を(2)(3)に相当する概念として、あえて訳さず音写することは、訳経の前例に随う方法として許容されるであろう。

ただ、欧米人の立場からすれば、「信心」を‘faith’と翻訳することは、自からの宗教的観念との間に関連性を見出しやすいという利点がある。さらに親鸞の著述に親しむにつれて、かれらは「信心」、すなわち浄土真宗の信仰が、キリスト教的信仰(faith)とかなり異質のものであることを自然に了解してゆくことになる。それ故にこの語をあえて英語に訳出することもまた大きな意義があるのである。ミシガン大学のゴメス<sup>27</sup>(Luis O. Gomez)教授は、“Notes on the Inscriptions on Sacred Scrolls—Songō Shinzō Meimon”の書評のなかで、

「『信心』は、たんに‘faith’ではなく、それは、‘believing mind’であり‘mind of faith’である——ということは、正しいし全く明瞭なことだ。しかし私には、『信心』は、faithの一般概念の一例であって、この事実が大胆にハッキリと受け入れられるならば、真宗は明瞭な説明的立場を得るであろうと思われる。このように受け入れることによって、真宗の信仰とプロテスタントの信仰との間に存する区別が不鮮明になるのではないかと恐れてはならないのだ」

(“Monumenta Nipponica” vol. XXXVIII, No. 1, Spring 1983) 原英文<sup>28</sup>

と述べているが、傾聴すべき意見である。

ゴメス先生は、大学院特別セミナーで、客員教授もお勤めになりました。また真宗大谷派の依頼で、浄土三部経の英訳をハワイ大学から出版しておられます<sup>29</sup>。大変にお世話になっている先生です。先に進みます。

「信心」は、欧米にいかにか表現されていくべきであろうか、という問題は、これからも波紋を広げてゆくことになりそうである。今後『教行信証』をはじめとする親鸞の著作がさらに翻訳され、またその著作の研究が欧米で深められてゆくにつれて、「信心」の真実の意味が徐々に欧米人の前に明らかになってゆくであろう。その意味で、去る三月真総研でコルゲート大学教授のカーター(John Ross Carter)氏が‘*Shinjin: more than Faith?*’と題して行った講演は記憶に新しい。

これは翻訳されていますので、興味があったらご覧下さい。これは「海外における仏教研究の方法と課題<sup>30</sup>」という題で、私が日本語訳しています。英語原文<sup>31</sup>のものも読む機会があれば幸いです。この時(1986年)にはまだ活字化されていませんでしたが、その一節を最後に読みます。

カーター博士は、「信心」の構造分析を通して、信心は浄土真宗の宗教的表現であること、信心に先立って帰命と聴聞があること、信心は他力であること、信心は弁証法的な働らきであること等々、に着眼し、キリスト教とは異った伝統のなかにある浄土真宗の「信心」を‘faith’と訳することに躊躇するところがあると述べられていた。このような浄土

真宗の概念をめぐる対話が活発化してゆくなかで『教行信証』は愈々本格的に日本人の手から欧米人へ手渡されてゆくであろう。

カーター先生は、コルゲート大学のチャペルハウスにおられる神学者で、原始仏教の専門家です。ダンマ・パダの翻訳を出しておられますが、真宗にも深い理解を示され、真総研でご講演もたびたびされました。本学とコルゲート大学の学生交流にも尽力された先生です。

長々と引用して恐縮です。セミナーで信巻を取り上げるについて、今日は前提的な話をさせていただいたことです。今日はもう時間が来ておりますので、少しばかりご質問をお受けしたいと思います。

安富： J（カナダ国費留学生・大谷大学研究生）さんは、今までに英訳『教行信証』を読んだことはありますか？

J： 鈴木先生のは読んだことがないです。

安富： それ以外のものは読まれた？

J： はい、Hirota 先生のを。

安富： どういう印象ですか？

J： 気に入りました。

安富： どういう点で？

J： *Shinjin* という日本語を、そのまま英語版でも残すのは良いと思います。なぜなら、*Shinjin* が文脈で分かるのですから。色々な所で意味が分かっていくので…

安富： Faith より良い？

J： *Shinjin* はそのままが良いと思います。それで Hirota 先生のもが良いです。

M（アメリカ人留学生・大谷大学博士後期課程2回生真宗学専攻）： 僕は「信心」の英訳があるはずだと思います。それを見出さなければならないです。それと、開教活動においては「信心」とはいかなるものなのかを伝えることが主な仕事だと思います。そこで *Shinjin* として残すと、初めて聞くアメリカ人にとって、何をいつているのか分からないという問題があります。この間8月に羽田信生<sup>のぶお</sup><sup>32</sup>先生の所を訪問したとき、英語で『教行信証』について講義なさったのを聞いて、羽田先生は様々な「信心」の訳語を使っておられました。*Shinjin* といったり、The mind of genuine entrusting といったり、Genuine understanding といったりして、そこで一つの定訳を作る必要があるのか分からなくなりました。

安富： 羽田先生は Entrusting という言葉を使いますね。

M： Understanding も使います。

安富： Faith という言葉の不便さの一つは、faith に動詞がないということですね。ところ

が、日本語で「信」とは「信ずる」と動詞でも使えるわけですけど、faith は名詞でしょ？ faith の動詞型はありますか？

M： Believe になってしまいます。

安富： Believe になっちゃうと、またちよつと違いますよね。大拙先生はあんまりこだわらないで faith と訳しちゃったんだけど、そういう点では文脈の中で色々説明をしておられると思います。やはり faith がキリスト教的だといっても、色々な広がりがあるわけでしょ。カントウエル・スミス<sup>33</sup> (1916-2000) に “*Faith and Belief*”<sup>34</sup> という本があります。私はちゃんと読んだわけではないですが、有名な宗教学の本です。

井上（大谷大学専任講師）先生、いかがですか？

井上： イスラムの信を faith を使って訳すというのは、やっぱりキリスト教的な意味だけではなく、イスラムのもそうだし、仏教も当然重なる部分はあると。だから（私は）Gómez 先生のご意見に非常に近いと思います。キリスト教の faith だけが厳密なものでなく、色々な宗教の faith と重なる、宗教に根本的な概念として共有できる部分があるという考え方に、僕は期待したいと思います。

安富： 大体、中国人が「信」という言葉を使ったときに、本当にインド人が使ったような信の意味で使っていたかどうかは分からないわけです。prasāda とか śraddhā とか、それを「信」と置き換えたわけです。中国人は大体超越的なものに対して信ずるということは稀薄だった民族でしょ。全然持たなかったどうかは別として、非常に現実的に物事を考えていくから、あまり超越性ということを考えない。やはり「信」は訳語として十分でなかったかもしれませんが、あえてその言葉を置いたわけですよ。śraddhā に「まこと」という意味があるかは知りませんが、「信」とすれば「まこと」という意味も出てきますしね。そこが不思議なところでもありますね。

M： 英語で話しているとき、「信」ということを faith といってしまう時があります。それが通じない話を…

安富： そういうのを「ツウジビリティー」っていうんですけどね（笑）。「ツウジバブル」とかね（笑）。これは大事なことで、やっぱり「通じていく」ということでね。それで、ある程度、お互いのチャンネルが開かれる。法語カレンダー（真宗教団連合発行）では *Shinjin* としています。あの英訳は日本人が見るから分かるけど、西洋の人が見て *Shinjin* と書いてあっても何のことか分からないだろうと思いますね。ですから、大拙先生が faith をどのように使われているかということも、これから勉強していく上で意味があると思います。

- <sup>1</sup> 大谷大学第3代学長。大正14年5月1日に入学者宣誓式においてなされた「樹立の精神」([http://www.otani.ac.jp/annai/kengaku\\_rinen/juritsu\\_s.html](http://www.otani.ac.jp/annai/kengaku_rinen/juritsu_s.html))は有名。
- <sup>2</sup> 哲学者。元京都大学教授。
- <sup>3</sup> 日本語訳「当協会の目的は、仏教研究、研究成果の出版、そして仏教の真の精神を流布していくことにある。当協会の目的に興味ある方は入会されたい。年会費十圓。『*The Eastern Buddhist*』誌は当協会会員には無料配布。お問い合わせは下記住所まで。事務長 鈴木大拙貞太郎 東京高田雑司が谷572。」
- <sup>4</sup> 京都大学名誉教授・大谷大学名誉教授・元EB誌編集者。
- <sup>5</sup> 元EB誌編集顧問。
- <sup>6</sup> 元EB誌編集顧問。現 London Shogyoji Trust (<http://www.threewheels.org.uk>) 僧侶。
- <sup>7</sup> 京都大学名誉教授。
- <sup>8</sup> 2006年10月10日～11月28日
- <sup>9</sup> シカゴ万博 (the World Fair in Chicago) の一環として開催された。
- <sup>10</sup> 大谷大学初代学長。「開校の辞」([http://www.otani.ac.jp/annai/kengaku\\_rinen/kaikou\\_ji.html](http://www.otani.ac.jp/annai/kengaku_rinen/kaikou_ji.html))は有名。真宗の興隆に生涯を捧げられた。
- <sup>11</sup> “*The Skeleton of Philosophy of Religion.*” Translated by Zenshiro Noguchi. 『清沢満之全集』(法蔵館 1995年) 第二巻 45-100 ページ・『清沢満之全集』(岩波書店 2002年) 第一巻 150(1)-109(42)ページ。
- <sup>12</sup> 禅文化研究所発行 (1990年)
- <sup>13</sup> 『宗教研究』288号 (1991年6月)
- <sup>14</sup> 1973. Kyoto: Shinshū Ōtaniha.
- <sup>15</sup> 大谷大学『真宗総合研究所研究所紀要』第四号 (1986年)
- <sup>16</sup> 五失三不易 (『仏教語大辞典』より) また五失本三不易ともいう。道安がサンスクリットの仏典の漢訳に際して、訳せば原意を失うもの五つ、訳が容易でなかったもの三つを数えたことをいう。
- <sup>17</sup> Authoritative Version の略。
- <sup>18</sup> 元EB誌編集顧問。
- <sup>19</sup> 1997. Kyoto: Jōdo Shinshū Hongwanji-ha.
- <sup>20</sup> ハワイの浄土真宗本願寺派寺院によって組織された団体。 <http://www.hongwanjihawaii.com/>
- <sup>21</sup> アメリカの浄土真宗本願寺派寺院によって組織された団体。  
<http://buddhistchurchesofamerica.org/home/>
- <sup>22</sup> アメリカの宗教学者 William James (1842-1910) の用語。鈴木はこれを「回心<sup>えしん</sup>」の訳語として採用した。
- <sup>23</sup> 1944年、シカゴ仏教会 (The Buddhist Temple of Chicago, BTC) を創立。俗名は久保瀬正雄。  
<http://www.budtempchi.org/>
- <sup>24</sup> 本文中の肩書きは1986年当時。現在ニューヨーク州立大学 (The State University of New York) 准教授。
- <sup>25</sup> 本文中の肩書きは1986年当時。現在オハイオ州立大学 (The Ohio State University) 教授。前EB誌編集顧問。
- <sup>26</sup> First, the reader familiar with previous Shin translations will be surprised to see that *shinjin*, most commonly translated as “faith” in other works, is left in romanized Japanese. The editors of this series believe that the term “faith” is not only misleading as an equivalent but also ambiguous as an English term itself . . . The position is tenable and I agree that one should not overemphasize the theistic appearance of Shinshū doctrine. If avoiding the word “faith” will help in this cause, I support the move.
- <sup>27</sup> 本文中の肩書きは1986年当時。現在ミシガン大学 (University of Michigan) 教授。
- <sup>28</sup> It is true, and certainly quite obvious, that *shinjin* does not mean simply ‘faith’; it is the

‘believing mind’ or the ‘mind of faith’. But it seems to me that *shinjin* is an instance of the general concept of faith, and that Shin Buddhism stands to gain in clarity of exposition if this fact is accepted boldly and explicitly. One need not fear that such an acceptance will blur the distinction that should be made between Shinshū and Protestant notions of faith.

<sup>29</sup> *The Land of Bliss: The Paradise of the Buddha of Measureless Light*, 1996. Kyoto: Higashi Honganji Shinshū Ōtani-ha, Honolulu: University of Hawai‘i Press. なお、2007年現在、上巻（『仏説無量寿経』・『仏説阿弥陀経』のサンスクリット語・中国語訳からの英訳）は刊行されているが、下巻（『仏説観無量寿経』の中国語からの英訳）の出版は未定。

<sup>30</sup> 大谷大学真宗総合研究所発行（1993年）

<sup>31</sup> 『大谷大学真宗総合研究所紀要』第四号（1986年）に掲載。

<sup>32</sup> 毎田周一センター所長（カリフォルニア州バークレー）。

<sup>33</sup> Wilfred Cantwell Smith, カナダ, 比較宗教学。

<sup>34</sup> 1987. Princeton: Princeton University Press.

表 I:

1954	(1) 稲垣最三訳((部分訳)) 〔本派本願寺典籍シリーズ No 2〕
1955	(2) ハワイ本派本願寺訳((部分訳)) 〔“The Shinshu Seiten” 所収〕
56	
57	(3) 杉平顎智((部分訳)) 〔『イースタンブディスト』 vol 8-3 所収〕
58	杉平訳((部分訳))〔同 vol 8-4 所収〕
↓	(4) 山本晃昭訳((全訳))〔華林文庫〕
65	
66	(5) 龍谷大学翻訳センター訳((部分訳)) 〔龍谷翻訳シリーズ No V 所収〕
67	
↓	
1973	(6) 鈴木大拙訳((全訳)) 〔真宗大谷派刊〕
74	
↓	
78	(7) アメリカ仏教会編纂((部分訳)) 〔“Shinshu Seiten” 所収〕
↓	
1983	(8) 本願寺国際センター訳 (1) ((全訳)) 〔真宗翻訳シリーズ 6〕
84	

表 II:

	大拙訳	本願寺訳	龍谷訳	山本訳
往 生	birth rebirth	birth	birth	birth
往生する	attain rebirth be born	attain birth be born	gain birth be born	gain birth
難思議往生	birth beyond conceivability	birth that is inconceivable	the Inconceivable birth	the All-Wonderful birth
難思往生			Inconprehensible Birth	Inconprehensible Birth
双樹林下往 生			Birth under the Twin Śāla Trees	Birth under the Twinshal trees
浄 土	Pure Land	Buddha Land	Pure Land	Pure Land
正定聚	company of the right definite assurance	Truly settled ones	the group of Rightly Established State	the Right Established State
証	realizing	realization	enlightenment	attainment
本 願	Original Prayer	Primal Vow	Original Vow	Original Vow
回 向	<i>ekō</i> ; <i>merit-turning-over</i>	Giving; being given; Amida's directing of virtue to sentient beings	Merit-transference	merit-transference
往相回向	the outgoing <i>ekō</i>	the aspect for our going forth to the Pure Land	the phase of Going	the phase for being born in the Pure Land
還相回向	the returning <i>ekō</i>	the aspect for our return to this world	the phase of Returning	the phase for coming back to this mundane world
大 行	Great Living	Great Practice	Great Practice	Great Practice
信 心	faith believing mind	<i>shinjin</i>	faith	faith
大 信	Great Faith	Great <i>shinjin</i>	Great Faith	Great Faith